

# 上村松園の作品における落款について

中村麗子

## はじめに

2010年に東京国立近代美術館と京都国立近代美術館で開催された「上村松園展」の準備過程において、筆者は同展出品作品に記された落款を精査する機会を得た。

本稿は、それら落款を紹介するとともに、落款の形態の特徴をもとに分類し、若干の考察を行うものである。

## 落款の形態による分類

2010年の展覧会に出品された本画は全部で88点である。そのうち精査し得た作品の点数は85点であった(1点は落款なし、2点は出品上の都合で精査の機会を逸した)。

落款は、「松園」が一番多く、他には「松園女史」「松園女筆」「松園女絵」などがある。本稿では、展覧会出品作品のすべての落款に共通して見られる「松園」の筆跡を考察の対象とした。

筆跡は形態によりいくつかのパターンに分類できる。各パターンの詳細は次のとおりである。本稿末尾に収録した写真もあわせて参照されたい。

### 落款A

「松園」の「松」の偏と旁を崩している。「園」はくにかまえの3画目を省略し、2画目の取筆をはねている。くにかまえの中は、「𠂔」の下半分を「乃」のような形に崩している。

### 落款B

「松」は楷書体である。「園」は異体字の楷書体である。

### 落款C

「松」の偏、旁ともに崩しているが、旁の崩し方がAとは異なる。パターンFのような、後に見られる崩し方である。「園」の崩し方はAと同様だが、Aよりも筆の運びに勢いがある。

### 落款D

「松」は楷書体である。「園」はくにかまえの中の「𠂔」の崩し方がパターンA、B、Cのいずれとも異なる。

### 落款E

「松」は偏、旁とも崩している。旁の崩し方はパターンA、Cのいずれとも異なる。「園」からは、明確なくにがまえが消え、文字の上部に、くにがまえの2画目はそのまま1画目と3画目を極端に短くしたような、ワ冠状のものが現れる。その下に、「園」のくにがまえの中にあつた「冫」を崩したものが配される。この「園」の書き方は松園作品の落款に非常に多く見られる。

### 落款F

「松」の旁の崩し方がパターンC、後出するJと同様である。「園」はEに似るが最後の字画が右上に抜けていく点が異なる。

### 落款G

全体的に細くて粘りのある筆致であり、起筆の細線が目立つ。「松」の旁の1画目と2画目の打ち込みが強いので、1画目と2画目の連続性がFより薄れ、間隔が広いようにも見える。3画目から最後の字画はFと同様に筆が途切れることなく書かれるが、Fと比べて縦方向がコンパクトである。「園」は、下半分が、Fでは「乃」のような形態であるのに対し、Gでは「と」のような形である。

### 落款H

「松」の旁の1画目と2画目の連続性がGより強い。「園」の下半分の「と」の形態は、Gでは縦画の後に続き大きく2度折れて筆が左下へと進むことで三角形が作られるが、Hでは筆線の折れが小さく三角形がつぶれており、Gのように三角形の中に支持体の地色が見えることはない。

### 落款I

全体に、Gと同様に細めの粘りのある筆線である。「松」は点画の打ち込みが強い。あまり崩していない。「園」の形態はGに類似する。

### 落款J

全体に、G、Iと同様に粘りのある筆線を用いる。「松」の偏の1画目は左上から入り右下へと抜けていく。これはGにも見られる。旁はC、Fとおおむね同様である。「園」の下半分、「と」の形態は、始めの縦画の後に続く2度の筆線の折れのうち2つめが、右へ大きくせり出している。

### 落款K

「松」の偏の1画目は、右下がりのものと右上がりのものが混在する。旁の2画目は、起筆の沈み込みが浅い。同じく旁の3画目から最後の字画は、C、F、G、H、Jでは「乙」字状をなしていたのに対し、Kでは平仮名の「つ」状になっている。旁全体が、Iの「松」の旁の2画目と3画目がつながった形であると見ることできる。「園」の形態はJの特徴を引き継いでいる。

## 落款L

「松」はKの形態と類似する。「園」ははっきりとしたくにかまえが見られるが、くにかまえの中の崩し方は、これまで見てきたパターンのうち明確なくにかまえを持つどの例とも異なる。なおここに掲載した落款には、松園の作品には珍しく、年記が書き込まれている。

## 落款M

「松」は、偏の1画目が左下から右上へ伸びる。傍の3画目から最後の字画までが「乙」ではなく「つ」の形態である。ここまではLと同様である。しかしLとは異なり、傍の1画目と2画目が連続している。また、傍の最後の字画に見られる左下方向への払いが勢いよく、「園」の1画目へと筆が途切れることなく空中を移動していく様子が想像できる。「園」はKの形態を踏襲するも、制作年の早い数例を除き、1画目の取筆のはねが抑えられている。パターンMの典型は《待月》(2010年の上村松園展における作品番号38(以下「作品番号」と略す)、1926年)や《母子》(作品番号59、1934年)であるが、このパターンの落款は、「松」「園」ともに、部分的にKの形態をあわせ持つものが多い。

## 落款N

「松」はMと同様である。「園」の下半分は、一見Mと似て「と」のような形である。だが、「と」の1画目の縦画の後に続く筆が、Mでは右に折れて反時計回りに動くのに対し、Nでは左上方向に抜け、浮き上がりながら時計回りに右上に移動した後、沈み込みながら左下に向かい、そのまま湾曲して最後の字画をなす。

## 落款O

「松」はNと類似するが、傍の最後の字画の取筆には、Nにあるような左下方向への払いは見られず、おとなしく押さえられている。「園」はNと同様と見てよい。

## 落款が書き込まれた時期について

以上、作品の落款をパターン分けしてみた。同一パターンの作品を見てみると、それらの制作年は互いにおおむね近いことが分かる。このことから、年を追うごとに落款の形態が変化していくと言えそうである。

しかし松園の作品に限らず、一般的に、落款のある作品すべてが、作品が完成すると同時に落款が書き込まれるわけではなく、作品が描かれた後、かなり時間が経ってから書き込まれることもある。このように作品の制作時期と落款の記入時期がずれている作品は、作風、落款の片方だけに頼ると制作年の判定を誤ってしまう恐れがある。

以下では、分類した各パターンの落款が記入された時期が、作品の制作時期と一致するかを確認する。

手法は、出品画(松園が生前に各種展覧会に出品した作品)について、出品当時に発行された雑誌あるいは展覧会図録で、作品の図版に落款が認められるかを確認するというものである。

落款が図版で確認できる場合、その落款の記入時期は作品の制作時期と一致すると見なせる。そのような落款の形態的特徴は、出品画でない等の理由で同様の手法を用いられない作品の落款を精査する際に指標となる。

以下は、出品画に書き込まれた各パターンの落款を、作品発表当時の図版で確認した結果である。

どの資料で図版および落款が確認できたかは、本稿の末尾に付した表に記した。

#### 落款A

この落款が記された作品が出品画でないため制作当時の写真がなく確認不能。

#### 落款B

この落款が記された作品はいずれも、展覧会目録や当時の雑誌記事に作品名が記されていること、同一作品名のものが他にないことから、展覧会出品画と推定されているが、出品当時の作品写真は残されていない。よって確認不能。

#### 落款C

この落款が記された作品は、展覧会出品画でないため確認不能。

#### 落款D

この落款が記されている《軽女悲離別図》(作品番号8、1900年)は、1900年の第6回新古美術品展にほぼ同題の作品が出品されたことが当時の雑誌記事で知られており、他に同一主題の作例が確認されていないことから、同展に出品されたものと推定されている。だが、当時の図版がなく、確認不能。

#### 落款E

この落款が記された《一家団欒》(作品番号4、1897年)と似た題のものが、1897年の第1回全国絵画共進会(京都後素協会主催)に出品されたことが開催当時の雑誌記事で確認される。本作品以外に同題の作品が知られていないことから、本作品が出品作と推定されている。しかし、当時の作品図版がなく、確認不能である。

#### 落款F

《人生の花》(作品番号5)は従来、1899年の第5回新古美術品展出品作とされてきたが、近年の研究により、そうでないことが分かっている。<sup>1)</sup>《人生の花》の制作直後の写真も知られておらず、確認不能。《虫の音》(作品番号19)は1908年の第13回新古美術品展に《秋の夜》という作品名で出品されていたとされているが、当時の資料では作品図版がなく確認不能。

## 落款G

いずれの作品も展覧会出品画でなく、制作直後の写真もないために確認不能。

## 落款H

今回の調査でこの落款が確認された4作品のうち、《春の粧》(作品番号15、1903年)は展覧会出品画とされているが、出品当時の作品写真は知られておらず、確認不能。《長夜》(作品番号17、1907年)は展覧会出品時の写真が雑誌で確認できた。写真では落款印章も確認できた。

## 落款I

展覧会出品画でなく、制作直後の写真資料もないため、確認不能。

## 落款J

これ以降の 패턴の落款が書き込まれた作例は多い。

この 패턴の落款が記入されているもののうち、展覧会出品画で、出品当時の写真資料で落款が書き込まれていたことが確認されたのは1913年の第7回文展に出品された《蜚》(作品番号25)のみである。1910年の日英博覧会に出品された《花見》(作品番号20)は、当時の図録に図版が掲載されているが、不鮮明であるため落款印章の有無が確認できない。《雪吹美人図》(作品番号23)は、1911年の第11回異画会展に出品されたとされているが、出品自体、当時の資料では確認できず、また制作直後の写真資料もなく確認不能。

## 落款K

この落款が書き入れられている作品のうち、展覧会出品時の図版で落款の確認ができたものは1914年の東京大正博覧会出品の《娘深雪》(作品番号27)、1915年の第9回文展に出品された《花がたみ》(作品番号31)である。この落款を持つ他の文展出品作《舞仕度》(作品番号28、1914年)、《焔》(作品番号33、1918年)、《楊貴妃》(作品番号34、1922年)は、展覧会出品当時の図版が不鮮明であるため、当時から落款が記入されていたか確認は不可能であった。

## 落款L

展覧会出品画でないため、制作直後に落款が記入されたかを確認できる資料がなく、不明。作品には年記が入っているが、この年記が作品制作時に記入された確証はなく、したがってこの落款がこの年のものであると断定することもできない。

## 落款M

この落款が展覧会出品当時に書き入れられていたことが確認されるのは、《娘》(作品番号37、1926年)、《待月》(作品番号38、1926年)、《伊勢大輔》(作品番号39、1929年)、《青眉》(作品番号58、1934年)、《母

子》(作品番号59、1934年)、《夕べ》(作品番号76、1935年)である。

#### 落款N

この落款を持つ作品は、展覧会出品画のほとんどについて、出品当時に落款が書き込まれていたことが確認できる。時期の一番早いもので1935年の《天保歌妓》(作品番号41)、《春苑》(作品番号42)、《鴛鴦鬪》(作品番号61)、一番時期の遅いもので1940年の《櫛》(作品番号69)、《鼓の音》(作品番号80)、《わか葉》(作品番号81)で確認できる。これら以外の作品については末尾の付表を参照されたい。

#### 落款O

この落款を持つ作品は1940年代の作品であり、絶筆とされる《初夏の夕》(作品番号88、1949年)にも認められる。しかし、時局が雑誌の刊行状況やその内容に大きな影響を与えていたため、落款が展覧会出品当時に作品に記入されていたことを証明する資料は乏しい。落款が出品当時に書き込まれていたことが確認できた作品は、《花に詠ず》(作品番号52、1941年)、《夕暮》(作品番号71、1941年)などである。なお、《冬雨》(作品番号51、1940年)は、展覧会出品時に雑誌に掲載された写真図版では、落款印章が確認されなかった。後から記入捺印されたのであろう。

#### 作品における落款と制作年の関係

以上より、出品画のうち当時の作品写真が確認できたものについては、ほとんどが出品当時に落款が書き込まれたものであることが分かった。

結果を踏まえ、改めて落款のパターンごとに作品を眺めてみると、出品画でない作品の落款と制作年の関係について、いくつか指摘できる。

#### 早い時期の作品について

今回調査した作品のうち、雑誌で制作当時の写真が確認された展覧会出品画では、1907年の《長夜》(作品番号17)が早いものである。それよりも早い時期に描かれたとされる出品画については、当時の写真資料が確認できないため、落款がいつ記入されたかを知ることができず、そもそも作品が展覧会に出品されたことの確証がない。

よって現状では、早い時期の作品と落款との関係について具体的な指摘を行うことは容易ではない。しかし、落款の形態の変遷はある程度整理することができそうであり、それにともない、落款の後入れの可能性くらいは指摘することができよう。

まず、AからHまでの落款の形態の変遷を整理してみよう。

A、Bは固さの残る楷書体であり、相当早い時期のものであることが想像される。Dも楷書体ではあるが、A、Bほどの固さはない。A、Bいずれの落款が先に用いられたかは、今回調査した作品が少なく

判断しづらいため、ここでは通説の制作年に従っておく。

Cが記入されている《人生の花》(作品番号7)は、従来言われている1899年が制作年であると信じるならばBとDの落款がある作品の間に位置してしかるべきであるが、落款の「松」の傍の崩し方および筆の伸びやかさがFに近い。なお「園」は明確なくがまえを残すが、後の作品に書き入れられた落款Lにも明確なくがまえが使われていることから、くがまえの有無は落款の変遷を考える手がかりにはならない。

Eは「園」の形態がFと類似しているが、筆の固さの点ではどちらかというDに近い。

FとGは、「松」の形態を比較すると、FのほうがHに近い。しかし「園」の形態に着目すると、GのほうがよりHに近く、その後の形態の変化を考えても、FがGとHの間に入るとは考えにくいことから、FがGの前に来ることとした。

GとHでは、「園」を比較するとGのほうがJに近い。しかし、「松」の傍の崩し方はHのほうがJに近く、GとHのいずれが先に用いられたか、判断に迷うところである。本稿では、1907年の《長夜》(作品番号17)発表時に使用されていたことが明らかなHよりも、Gのほうが後に来ると判断するための材料を持たないので、作品の通説の制作年に従いG→Hと考えておく。

Iは「園」の形態からして、Gの時期と使用時期がほぼ同じと考えられる。

以上をまとめると、

A→B→D→E→F→G→H

C I

となる(CはFと、IはGと同時期頃の使用であることを意味する)。

これにより以下のことが推定される。

Dの落款を持つ《軽女悲離別図》(作品番号8、1900年)とEの落款を持つ《一家団樂》(作品番号4、1897年)の制作年がそれぞれ従来の見解どおりであるならば、《一家団樂》の落款は後から記されたと考えることができる。

Cの落款を持つ《人生の花》(作品番号7、1899年)の落款も、作品が通説どおり1899年に制作されたならば後入れである。Fの落款を持つ《人生の花》(作品番号5、1899年)も同様に落款は後入れと見なせる。Hの落款を持つ《人生の花》(作品番号6、1899年)も同様である。

パターンGに属する《粧》(作品番号10、1900年頃)、パターンHの《蜃気楼》(作品番号9、1900年頃)、パターンIの《浴後美人》(作品番号11、1900年頃)の落款も、Dの落款を持つ《軽女悲離別図》と制作年がほぼ同じと信じるならば、落款の形態がDとはかけ離れているので、後入れと考えることができる。

### 《虫の音》(作品番号19、1908年)について

Fの落款を持つ《虫の音》は、1908年の第13回新古美術品展に出品されたと言われており、落款Hの使用が明らかとなっている《長夜》(作品番号17、1907年)より1年後のものである。

「園」の形態の変遷に注目すると、落款G、Hから落款Jへの移行には自然な連続性が感じられ、先に述べたとおり、その間にこの落款Fが並行して使用される可能性は低いと思われる。

以上のことから、この作品については以下の仮説が考えられる。

1. 松園は、1908年より前にこの作品を制作し、展覧会に出品した。
2. この作品とは別のものが展覧会に出品された。<sup>2)</sup>

ただし、本稿では仮説を提示するのみにとどめ、検証までは行わない。

#### 《四季美人図》(作品番号12、1900年頃)、《しゃぼん玉》(作品番号16、1903年頃)について

《四季美人図》は4幅対で、いずれも落款Jに分類される落款を持つ。Jの落款は、1913年の第7回展覧会に出品された《蛩》(作品番号25)に展覧会出品当時から記されていたものである。この4幅対の制作年は《蛩》よりかなり以前にさかのぼるが、この制作年の推定については廣海伸彦氏の論考<sup>3)</sup>が有力な手がかりを提供してくれている。氏の研究に従って1900年頃の制作とするならば、作品中の落款は後から記入されたものと見なすことができる。

《しゃぼん玉》も、通説どおり、《長夜》よりさかのぼった1903年頃の制作とするならば、落款は後から書き込まれたものということになる。

#### 《虫の音》(作品番号18、1907年頃)について

この作品の制作年を大正中期とする説があったが、2010年の展覧会準備の際に、《花のにぎわい》(1907年)<sup>4)</sup>の人物の相貌と落款印章が類似しているという理由から、制作年を1907年頃とした。今回の落款の精査によっても、本作品は大正中期作でないことが裏付けられた。落款Jを持つ早い例といえよう。

#### 《納涼美人図》(作品番号24、明治末期)について

この作品も、1914-15年頃の作という説があったが、2010年の展覧会準備の折に、画中の人物の顔の表現を分析し、《花》(作品番号22、1910年)あたりまで制作年がさかのぼる可能性があると判断した。今回落款を確認したところ、《娘深雪》(作品番号27、1914年)や《花がたみ》(作品番号31、1915年)の落款とは明らかに違い、それらよりも前で《長夜》(1907年)よりも後のものであることが分かり、落款の面からも作品の制作時期を裏付けることができた。

#### 《梅下佳人》(作品番号35、1924年)について

この作品は、管見の限り、年記が書き込まれた唯一の作例である。しかし出品画ではないので、年記にある1924年にこの落款が記されたかを確認できる資料は見当たらない。この落款のように明確なくにがまえを持つ「園」が書かれた作例は前後の年代を探しても類例が乏しく、年記、落款の施された時期を絞り込むのは難しい。「女史」の字も、この作品のものにはにじんでおり、他の作品のそれとは比較しづらい。



### 《簾のかげ》(作品番号75、1929年頃)、《新蛩》(作品番号57、1932年)、《美人納涼》(作品番号40、1932年頃)について

先に、落款Mの中には部分的にKの特徴をあわせ持つものがあると述べた。その特徴の1つが、「園」の1画目の取筆がはねているというものである。《簾のかげ》《新蛩》では、落款の記入時期が確定している《娘》(作品番号37、1926年)と同様、「園」の1画目の取筆がはねている。落款Mを持つ作品のうち、落款が書き込まれた時期が確定しているものの中で《娘》のみがこの特徴を持ち、その後続く《待月》(作品番号38)ではすでに「園」の1画目の取筆が抑えられ、以降の作品では同様の形態が続く。よって、《簾のかげ》《新蛩》は、《娘》と同じ時期まで制作年をさかのぼらせることができるのではないだろうか。《簾のかげ》の女性の顔の表現は、《娘》のそれに類似している。

これにともない、《新蛩》と大きさが近似し、水墨表現を背景とした人物画という点でも類似を見せる《美人納涼》の制作年もさかのぼる可能性がある。ただ、落款の「園」の1画目の取筆が抑えられていることから、落款自体は後のものであり、もし作品の制作年を1932年より前にさかのぼらせるならば、後入れと見なすことができる。が、あくまでも落款を制作時期確定の基準とするならば、《美人納涼》の制作時期の通説は妥当と言えそうである。

### 《円窓美人》(作品番号53、1943年頃)について

この作品には落款Nが書き込まれている。落款Nは先の調査により、1940年までは確実に使われていたことが明らかになっている。今回調査した作品で、1940年より後に制作されたとされる作品のうち、この《円窓美人》以外のものには落款Oが記入されている。これに加え、すでに1943年までに落款Oを確実に使用していた例が複数確認できることから、落款Oを多用する中で《円窓美人》1点だけに落款Nを使用するのは不自然といえる。よって《円窓美人》の制作年は1940年またはそれ以前にさかのぼる可能性があるのではないだろうか。たとえば、2010年の展覧会の準備の際には所在が突き止められなかった《春鶯》(1939年、第5回春虹会展出品)は、図様が《円窓美人》と類似しており、《円窓美人》が《春鶯》と同じ頃に作成されたと想像することも不可能ではないだろう。

### 《雪》(作品番号67、1939年)について

落款Oを持つこの作品は1939年の三越新作日本画展に出品されたと言われてきたが、雑誌の展評<sup>5)</sup>にある同題の作品に関する記述から、本作品は展覧会出品画ではないことが分かった。よって本作品が1939年の作であるという確証はない。1930年代に落款Oを使用した例は、今回調査した作品の中にはほかになく、また非常に類似した図様の《雪》(東京国立近代美術館蔵)が1942年の軍用機献納作品展に出品されたことが確認されているため、本作品の制作年も1942年頃まで下げてもよいのではないだろうか。

## おわりに

以上、可能なものについて作品の落款の記入時期を調査したうえで落款の使用の変遷や落款の後入れ、作品の制作年について考察してきた。

資料の乏しさから、明治期の作品は、通説となっている制作年から離れて制作年を改めて細かく確定することは難しい。よって、明治のものは、作品の制作年を通説どおりと仮定したうえで、落款の後入れについて主に考えてみた。

明治末から大正期、昭和初期にかけては画風自体が変わっていくことが明確に分かるため、出品画でなくとも、画風と落款の両面から制作時期を絞り込むことは比較的容易である。

なお、《舞仕度》《焰》《楊貴妃》といった文展、帝展の重要作の落款が、図版が不鮮明であるため、出品当時に作品に記入されていたか確認できなかったのは残念である。

昭和期の作例は明治大正に比べ多いが、完成期というせいもあり画風の変化に乏しい。それゆえに、出品画でないものについて、落款は制作時期を確定するのに比較的有用であると思われる。

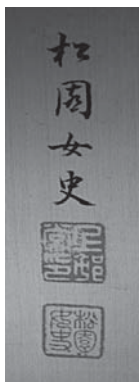
本稿で述べた私見について異論も多々あるかと思う。また今回の調査では、印章を考察の対象から外した。本稿をきっかけに、今一度松園作品の制作年や落款、印章について議論が活発化するならば幸いである。

## 註

- 1) 國永裕子「上村松園の初期作品《花ざかり》についての一考察」『美学論究』25編、2010年3月
- 2) なお、この作品と同図様の作品の存在が知られているが、画集で見ると落款印章は見あたらない。同図様の作品の図版は『上村松園画集』（京都新聞社、1989年）所載の43番。
- 3) 廣海伸彦「上村松園研究の一断章—晩年期における歌麿大首絵の遺響」『出光美術館研究紀要』14号、2009年1月
- 4) 註2掲載文献、35番。
- 5) 神崎憲一「三越新作日本画展」『塔影』15巻2号、1939年2月

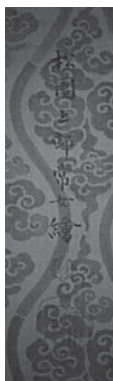
落款一覽

落款A



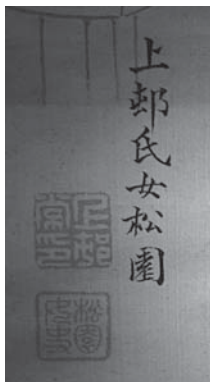
1《四季美人》1892頃

落款D

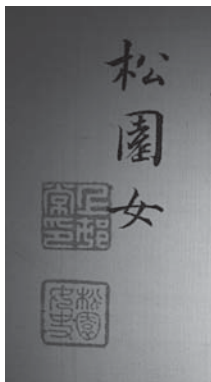


8《輕女悲離別図》1900

落款B

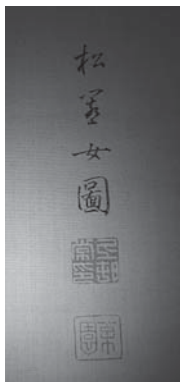


3《義貞勾当内侍を視る》1895



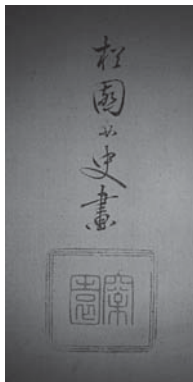
2《清女褰簾之図》1895

落款E



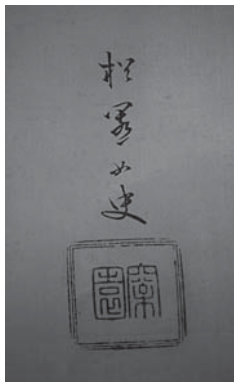
4《一家団樂》1897

落款C

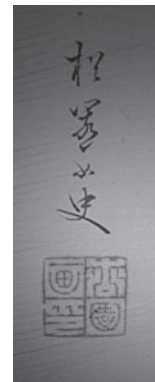


7《人生の花》1899

落款F

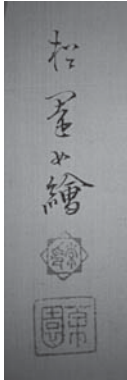


5《人生の花》1899

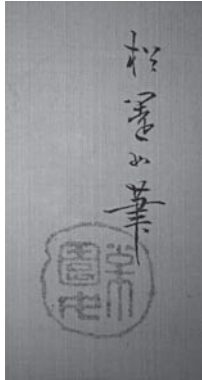


19《虫の音》1908

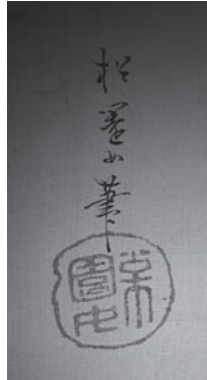
落款G



10《粧》1900頃

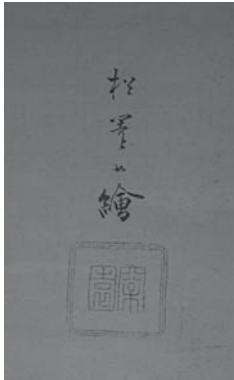


13《よそほい》1902頃

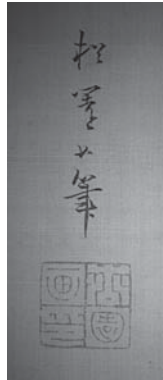


14《時雨》1902頃

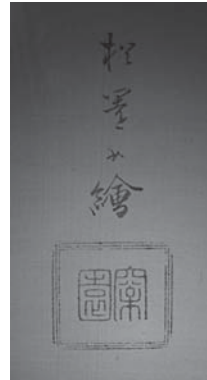
落款H



6《人生の花》1899



9《蜃気楼》1900頃

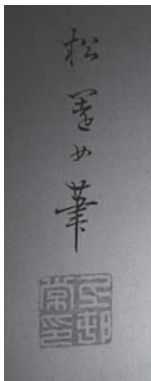


15《春の粧》1903



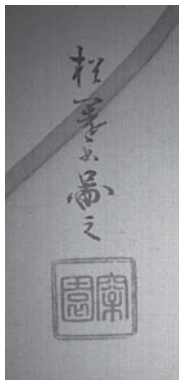
17《長夜》1907

落款I

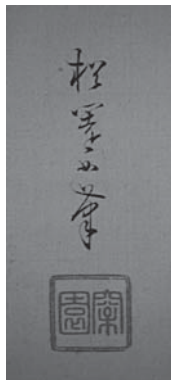


11《浴後美人》1900頃

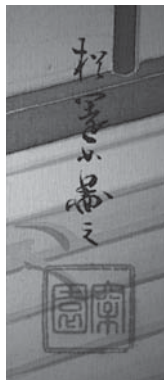
落款J



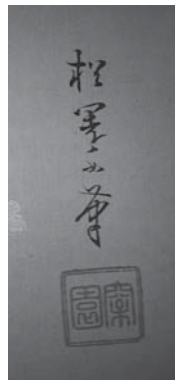
12《四季美人图》のうち春  
1900頃



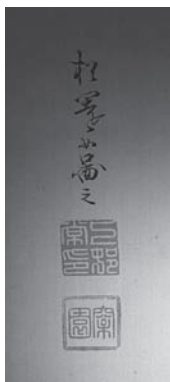
12《四季美人图》のうち夏  
1900頃



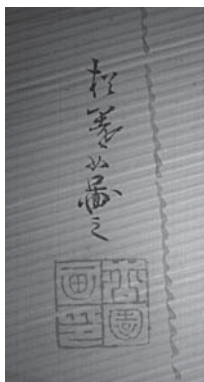
12《四季美人图》のうち秋  
1900頃



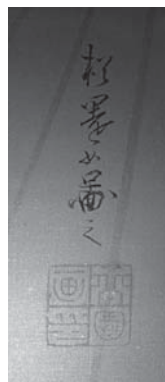
12《四季美人图》のうち冬  
1900頃



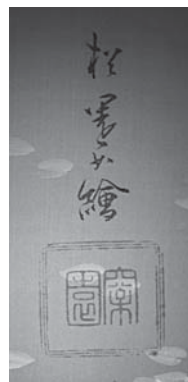
16《しゃぼん玉》1903頃



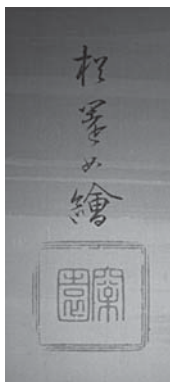
18《虫の音》1907頃



20《花見》1910



22《花》1910



23《雪吹美人图》1911

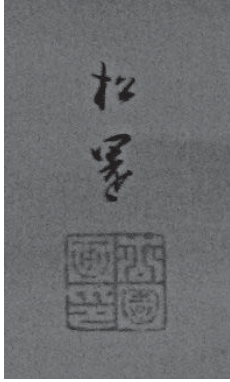


24《納涼美人图》明治末期

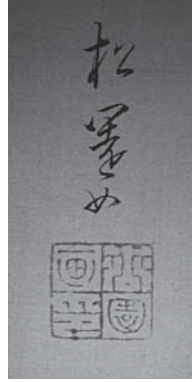


25《螢》1913

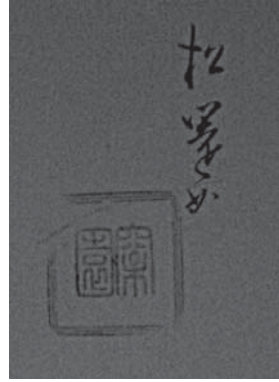
落款K



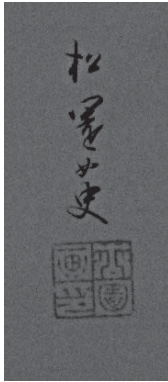
26《化粧の図》1913頃



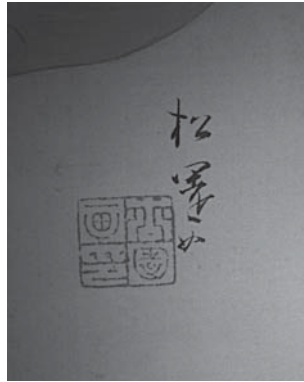
27《娘深雪》1914



28《舞仕度》1914



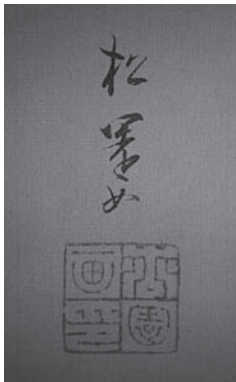
30《朝》1914頃



29《楚蓮香》1914頃



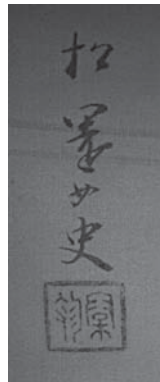
31《花がたみ》1915



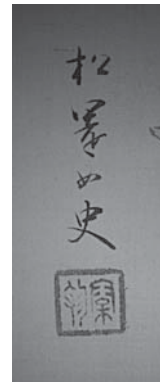
32《お万の図》1915



33《焰》1918

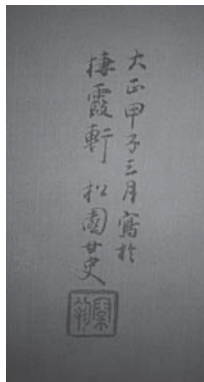


34《楊貴妃》1922



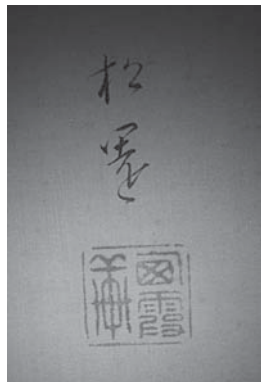
36《楚蓮香之図》1924頃

落款L

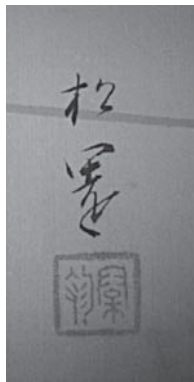


35《梅下佳人》1924

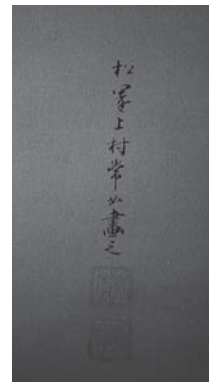
落款M



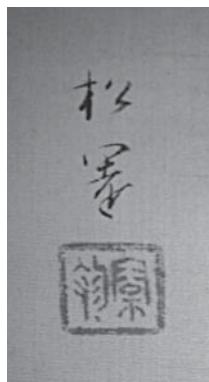
37《娘》1926



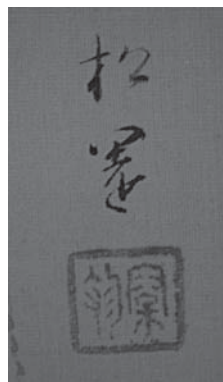
38《待月》1926



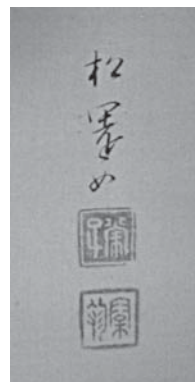
39《伊勢大輔》1929



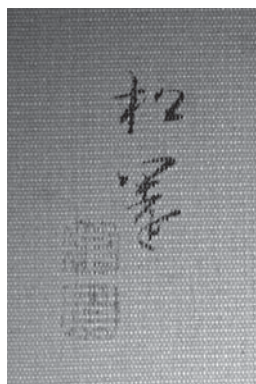
74《新蛩》1929



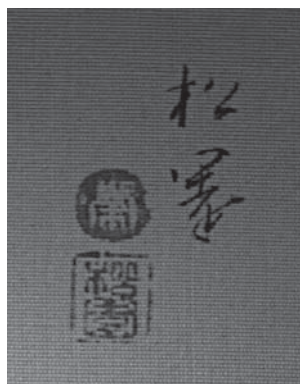
75《簾のかけ》1929頃



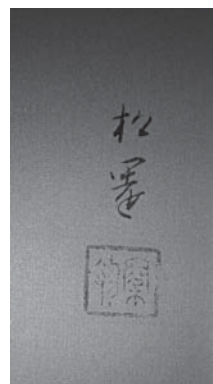
56《虹を見る》1932



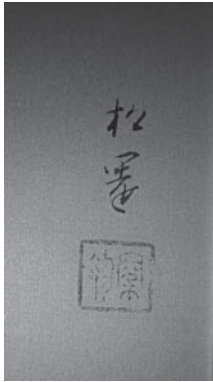
57《新蛩》1932



40《美人納涼》1932頃



58《青眉》1934

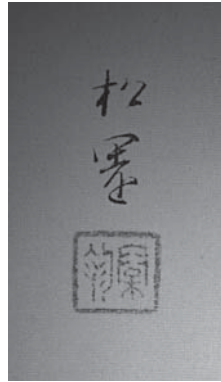


59《母子》1934

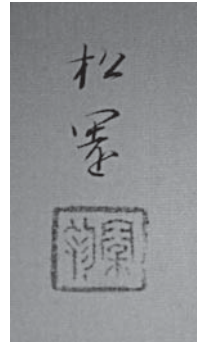


76《夕べ》1935

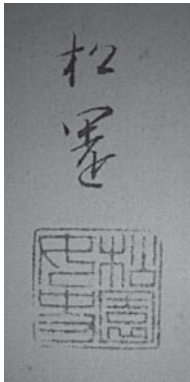
落款N



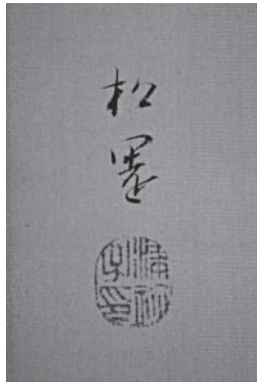
41《天保歌妓》1935



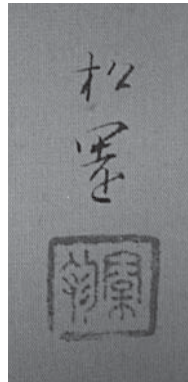
61《鴛鴦番》1935



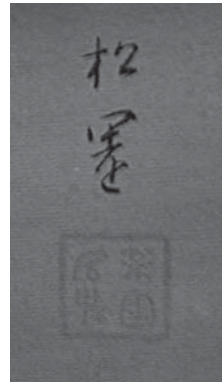
60《春粧》1935



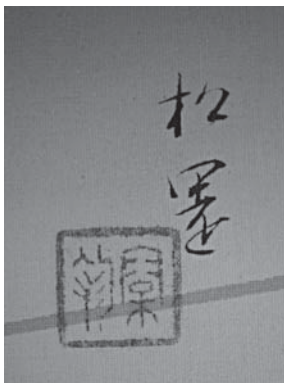
43《夕くみ》1935頃



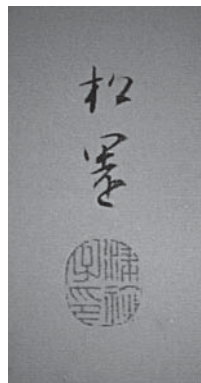
42《春苑》1935



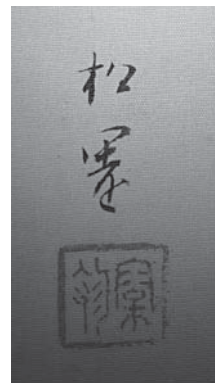
77《序の舞》1936



45《春宵》1936

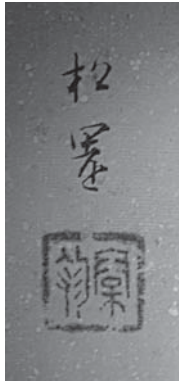


62《秋の粧》1936

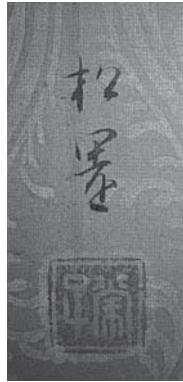


63《春雪》1937

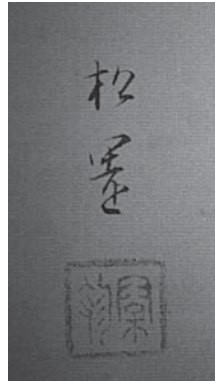




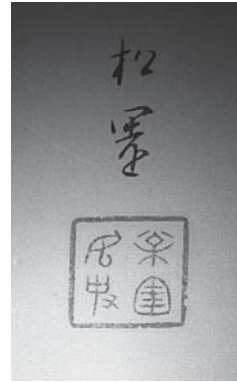
46《雪月花》のうち雪 1937



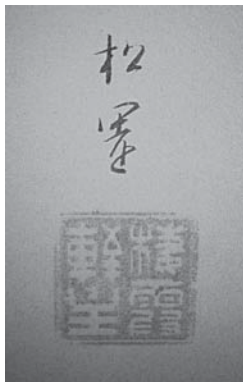
46《雪月花》のうち月 1937



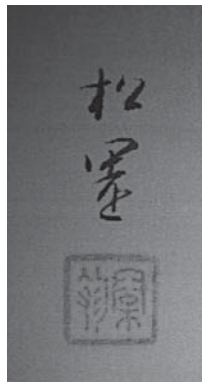
46《雪月花》のうち花 1937



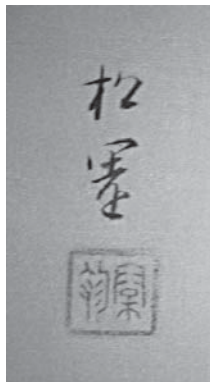
78《朝ぞら》1937



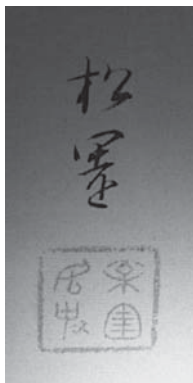
47《草紙洗小町》1937



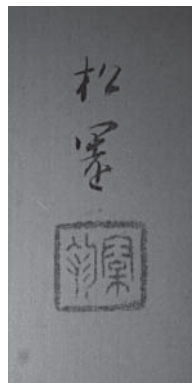
64《灯》1937



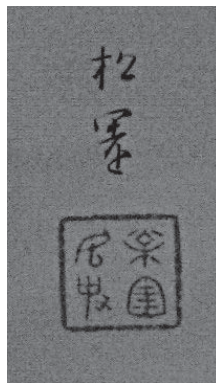
79《鼓の音》1938



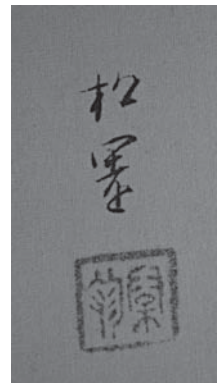
48《粘》1938



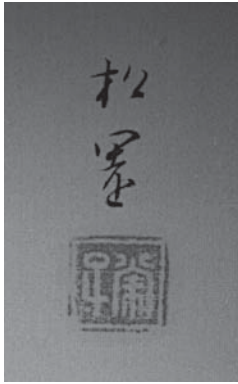
66《春》1938



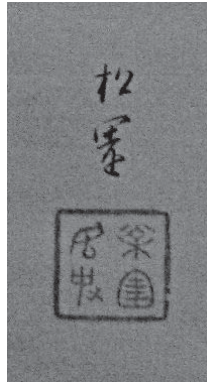
68《風》1939



49《菊寿》1939頃

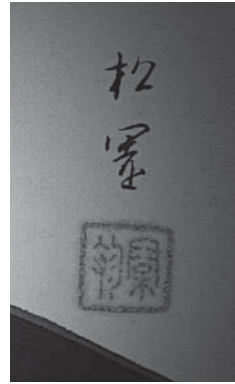


50《美人書見図》1939頃

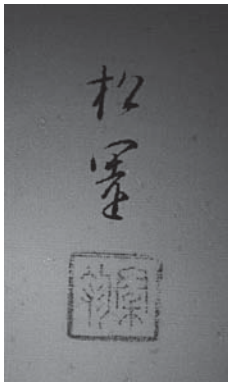


69《櫛》1940

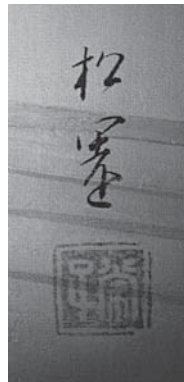
落款O



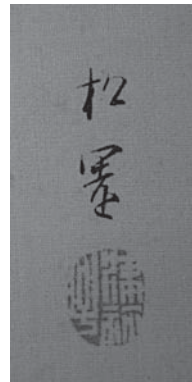
67《雪》1939



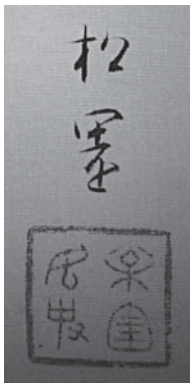
80《鼓の音》1940



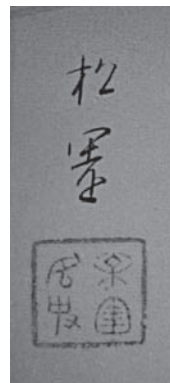
81《わか葉》1940



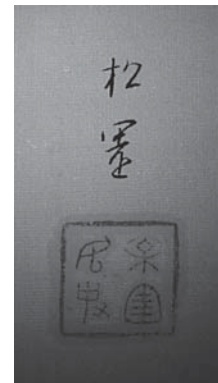
51《冬雨》1940



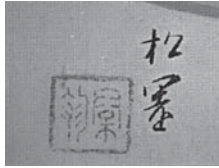
53《円窓美人》1943頃



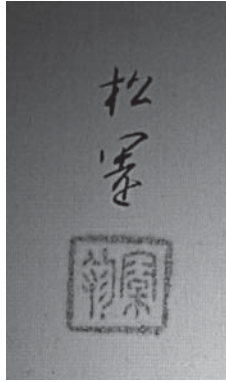
71《夕暮》1941



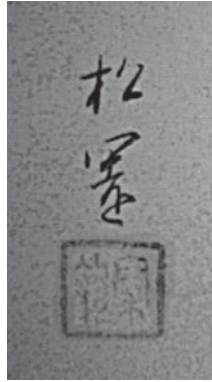
70《晴日》1941



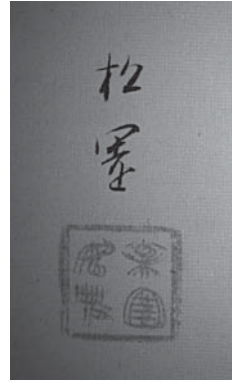
52《花に詠ず》1941



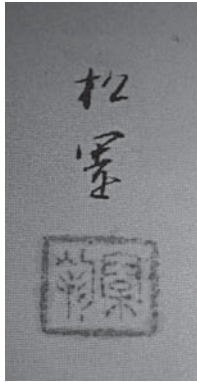
82《賞秋》1942



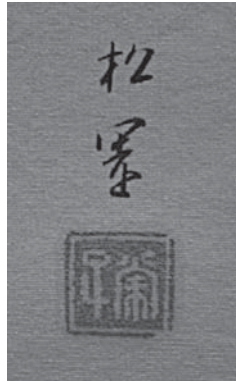
72《晚秋》1943



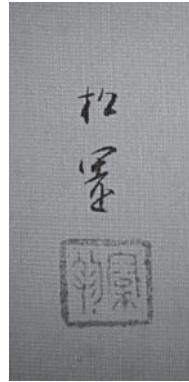
54《静》1944



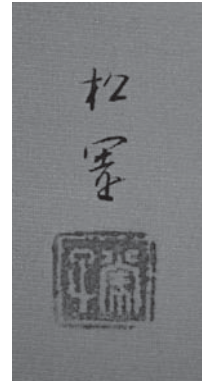
83《新蛩》1944



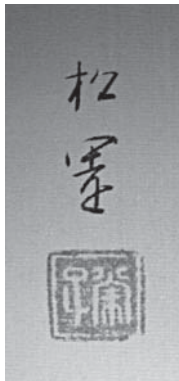
84《待月》1944



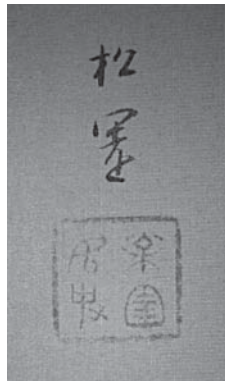
55《古代汐くみ》1944



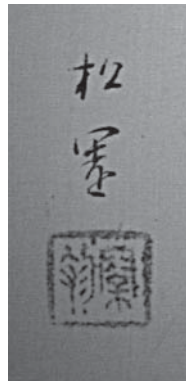
73《牡丹雪》1944



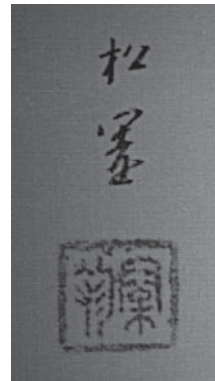
85《静思》1946



86《庭の雪》1948



87《若葉》1949頃



88《初夏の夕》1949(絶筆)

## 凡例

- ・この一覧は、2010年に開催された上村松園展(東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、日本経済新聞社)に出品された本画88点のうち85点の落款の写真を配列している。
- ・写真は落款のパターン別に分けて配列した。同一パターンの落款を持つものは、作品の制作年順に配列した。
- ・それぞれの落款写真の下には、2010年松園展作品番号、作品名、制作年を付した。
- ・これらの情報は2010年の同展の展覧会図録にならった。本稿の本文でこれらの情報について幾つかの訂正を試みているが、それら訂正についてはここには記されていない。
- ・これらの情報のうち太字で示されているものは、作品の制作時期と落款の記入時期が同じと考えられる作品である。詳細は本文と付表を参照されたい。

## 付表

### 凡例

- ・この表は、2010年に開催された上村松園展（東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、日本経済新聞社）に出品された本画88点のうち85点の情報を掲載している。
- ・作品は落款のパターン別に分けて配列した。同一パターンの落款を持つ作品は、制作年順に配列した。
- ・各作品についての情報は、2010年松園展作品番号、作品名、制作年、初出品展、落款が確認できた図版掲載文献、所蔵の順に記した。
- ・各作品の情報は2010年の松園展の図録にならった。本稿の本文でこれらの情報について幾つかの訂正を試みているが、それら訂正についてはこの付表には記されていない。
- ・初出品展が明記されているもののうち、出品時に作成された展覧会図録や雑誌等の文献で図版が同定できないものについては、初出品展名の末尾に\*を付した。出品時の作品名が2010年の松園展の図録にあるものと異なる場合は《 》でそれを示した。
- ・落款が確認できた図版掲載文献が空欄のものは、出品画でないため文献探索を行っていない作品である。

### 落款 A

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
1	四季美人	1892 頃			光記念館

### 落款 B

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
3	義貞勾当内侍を視る	1895	日本青年絵画共進会 （《義貞聴琴図》）*	出品時の図版なし	
2	清女褰簾之図	1895	第4回内国勧業博覧会 （《清少納言褰簾ノ図》）*	出品時の図版なし	公益財団法人 北野美術館

### 落款 C

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
7	人生の花	1899			京都市美術館

### 落款 D

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
8	軽女悲離別図	1900	第6回新古美術品展 （《軽女悲離別ノ図》）*	出品時の図版なし	

### 落款 E

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
4	一家団欒	1897	第1回全国絵画共進会（京都後素協会主催）（《一家楽居図》）*	出品時の図版なし	

### 落款 F

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
5	人生の花	1899			名都美術館
19	虫の音	1908	第13回新古美術品展 （《秋の夜》）*	出品時の図版なし	大松美術館

### 落款 G

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
10	粧	1900 頃			
13	よそほい	1902 頃			福富太郎コレク ション資料室
14	時雨	1902 頃			

落款 H

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
6	人生の花	1899			京都市美術館
9	蜃気楼	1900 頃			
15	春の粧	1903	全国絵画共進会（北陸絵画協会主催）（《春景》）*	出品時の図版なし	総成カントリー倶楽部
17	長夜	1907	第 1 回文展	『美術新報』6 巻 12 号（1908 年 1 月 5 日）	

落款 I

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
11	浴後美人	1900 頃			

落款 J

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
12	四季美人図のうち春	1900 頃			出光美術館
12	四季美人図のうち夏	1900 頃			出光美術館
12	四季美人図のうち秋	1900 頃			出光美術館
12	四季美人図のうち冬	1900 頃			出光美術館
16	しゃぼん玉	1903 頃			
18	虫の音	1907 頃			
20	花見	1910	日英博覧会	【確認不能】『日英博覧会新美術出品図録』（日英博覧会事務局、1910 年 4 月）国会図書館マイクロ資料	松伯美術館
22	花	1910			姫路市立美術館
23	雪吹美人図	1911	第 11 回美術会展*	出品時の図版なし	財団法人 ウッドワン美術館
24	納涼美人図	明治末期			
25	蛭	1913	第 7 回文展	『美術新報』13 巻 1 号（1913 年 11 月）	山種美術館

落款 K

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
26	化粧の図	1913 頃			
27	娘深雪	1914	東京大正博覧会（《深雪》）	『美術新報』13 巻 8 号（1914 年 6 月）	足立美術館
28	舞仕度	1914	第 8 回文展（《舞志たく》）	【確認不能】『美術新報』14 巻 1 号（1914 年 11 月）	京都国立近代美術館
30	朝	1914 頃			
29	楚蓮香	1914 頃			
31	花がたみ	1915	第 9 回文展	『美術新報』15 巻 1 号（1915 年 11 月）	松伯美術館
32	お万の図	1915			名都美術館
33	焔	1918	第 12 回文展	【確認不能】『中央美術』4 巻 11 号（1918 年 11 月）、『美術新報』1 巻 2 号（1918 年 11 月）	東京国立博物館

34	楊貴妃	1922	第4回帝展	【確認不能】『中央美術』86号(1922年11月)	松伯美術館
36	楚蓮香之図	1924頃			京都国立近代美術館

落款 L

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
35	梅下佳人	1924			

落款 M

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
37	娘	1926	第1回聖徳太子奉讃美術展	『アトリエ』3巻6号(1926年6月)	松伯美術館
38	待月	1926	第7回帝展	『中央美術』12巻11号(1926年11月)	京都市美術館
39	伊勢大輔	1929	羅馬開催日本美術展(1930年)	『羅馬開催日本美術展覧会記念図録 上』(成徳堂、1930年3月)	
74	新蚕	1929	羅馬開催日本美術展(1930年)	【未確認】(会場写真の存在が『近代画説』11所収の草薙奈津子氏の論考で指摘されている。)	山種美術館
75	簾のかげ	1929頃			財団法人 セゾン現代美術館
56	虹を見る	1932			京都国立近代美術館
57	新蚕	1932			松伯美術館
40	美人納涼	1932頃			
58	青眉	1934	大礼記念京都美術館美術展	『大禮記念京都美術館美術展覧会図録』(芸艸堂、1934年6月)	吉野石膏株式会社
59	母子	1934	第15回帝展	『美之國』10巻11号(1934年11月)	東京国立近代美術館
76	夕べ	1935	第1回五葉会展	『塔影』11巻9号(1935年9月)	山種美術館
60	春粧	1935	大阪美術倶楽部25周年記念展	【未確認】展覧会に言及した雑誌資料未見	
43	汐くみ	1935頃			大阪市立近代美術館建設準備室
45	春宵	1936			奈良県立美術館

落款 N

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
41	天保歌妓	1935	第1回春虹会展	『美之國』11巻4号(1935年4月)	
61	鴛鴦鬪	1935	第1回三越日本画展	『塔影』12巻2号(1936年2月)	
42	春苑	1935	高島屋現代名家新作展	『日本美術年鑑 昭和11年版』(美術研究所、1936年10月)	島田市博物館
77	序の舞	1936	昭和11年文展招待展(《序之舞》)	『美之國』12巻12号(1936年12月)	東京藝術大学
62	秋の粧	1936	第26回京都表装展*	出品時の図版なし(『阿々土』19号上村松園特集(1937年5月)にあり)	西宮市大谷記念美術館
63	春雪	1937	第3回春虹会展	『塔影』13巻4号(1937年4月)	大松美術館
46	雪月花のうち雪	1937		『美之國』13巻7号(1937年7月)	宮内庁三の丸尚蔵館

46	雪月花のうち月	1937		『美之國』13巻7号(1937年7月)	宮内庁三の丸尚蔵館
46	雪月花のうち花	1937		『美之國』13巻7号(1937年7月)	宮内庁三の丸尚蔵館
78	朝ぞら	1937	第3回珊瑚々会展	『塔影』13巻9号(1937年9月)	
47	草紙洗小町	1937	第1回新文展	『美之國』13巻11号(1937年11月)	東京藝術大学
64	灯	1937	第3回三越日本画展*	出品時の図版なし	出光美術館
79	鼓の音	1938	京都美術倶楽部30周年記念展	『塔影』14巻7号(1938年7月)	
48	砧	1938	第2回新文展	『美之國』14巻11号(1938年11月)	山種美術館
66	春	1938	松浦松榮堂、藤岡光影堂主催 日本画大家新作画表装展	『畫室』5巻5号(1938年5月)	
68	風	1939	第5回珊瑚々会展	『塔影』15巻8号(1939年8月)	公益財団法人 北野美術館
49	菊寿	1939頃			東京富士美術館
50	美人書見図	1939頃			吉野石膏株式会社
69	櫛	1940	第6回春虹会展	『塔影』16巻5号(1940年5月)	
80	鼓の音	1940	紐育万国博覧会出品画展示会	『塔影』16巻6号(1940年6月)	松伯美術館
81	わか葉	1940	第6回珊瑚々会展	『塔影』16巻8号(1940年8月)	名都美術館
53	円窓美人	1943頃			

#### 落款〇

作品番号	作品名	制作年	初出品展	落款が確認できた図版掲載文献	所蔵
67	雪	1939			
51	冬雨	1940	三越新作日本画展(《冬の雨》)	出品時落款印章なし(『塔影』17巻2号、1941年2月)	
71	夕暮	1941	第4回新文展	『文部省美術展覧会図録』(文部省編纂、審美書院発行、1941年)	京都府立鴨沂高等学校
70	晴日	1941	第6回京都市美術展	『畫室』8巻5号(1941年5月)	京都市美術館
52	花に詠ず	1941	第7回春虹会展	『塔影』17巻6号(1941年6月)	
82	賞秋	1942			
72	晩秋	1943	関西邦画展*	出品時の図版なし(『日本美術年鑑(昭和19、20、21年版)』(国立博物館編、1949年12月)にあり)	大阪市立美術館
54	静	1944	戦艦献納帝国芸術院会員美術展*	出品時の図版なし	東京国立近代美術館
83	新蛭	1944	戦艦献納帝国芸術院会員美術展*	出品時の図版なし	東京国立近代美術館
84	待月	1944			足立美術館
55	古代汐くみ	1944			
73	牡丹雪	1944			足立美術館
85	静思	1946	第10回珊瑚々会展*	出品時の図版なし	大松美術館
86	庭の雪	1948	第1回白寿会展*	出品時の図版なし	山種美術館
87	若葉	1949頃			
88	初夏の夕	1949(絶筆)	松坂屋現代美術巨匠作品鑑賞会展*	出品時の図版なし	



# The *Rakkan* (Signatures) on the Paintings of Uemura Shoen

Nakamura Reiko

This paper presents the results of an examination of the *rakkan* (signatures) appearing on the paintings of Uemura Shoen (1875-1949).

The paper begins by introducing the *rakkan* on 85 paintings from among the 88 shown in the *Uemura Shoen Exhibition*, held at The National Museum of Modern Art, Tokyo in 2010. These have been categorized into 15 groups ('A' to 'O'), according to the configurational characteristics of the *rakkan*, and the characteristics of each group are described in detail.

The next step investigates the periods of use of each group's *rakkan*. The methodology for this study involved using photographs of Shoen's paintings illustrating magazines and exhibition catalogues published at the time that she presented her works at various exhibitions during her lifetime, and examining them to confirm whether her *rakkan* appears on these works.

Thereafter, based on the results of the aforementioned study, an examination is made of the *rakkan* and production dates of those paintings among the 85 selected that Shoen did not display in any exhibitions. However, the showing in exhibitions of the majority of her Meiji era works can not be verified with documentary material of the time. Consequently, it is impossible to fix the time of use of the *rakkan* appearing on works of this period. Be that as it may, as changes in her *rakkan* use can be postulated to a certain degree based on configurational characteristics, this study undertakes this task. These inferences, as well as accepted theories on production dates, provide the basis for investigating the time periods of the use of Shoen's *rakkan*.

Compared with the Meiji era, there is much more documentary material available to support an investigation of the periods of use of *rakkan* appearing on Shoen's Taisho era works. Moreover, the transformations in Shoen's paintings during this era are also clearly defined. Therefore, this study provides corrections to the heretofore conventionally accepted periods of production of several Shoen works, based on the characteristics of the configurations of her *rakkan* and her painting style.

As for Shoen's Showa era works, while her painting style changed little during this period, there is a great amount of documentary material available to establish the periods of use of her *rakkan*, with the exception of the case of her works painted late in her life. Therefore, for his Showa works as well, the study corrects the period of production of several works, by using the configurational characteristics of her *rakkan*.